儒学論集
儒学文化　第 2 号
巻　頭　言

朱子学と心の教育

学校法人昌平黌　理事長
儒学文化研究所　所　長
田　久　孝　翁

ミレニアム、1000 年紀の出発です。それこそ長い長いドラマの始まりです。加えて今年の干支は「辛巳」とあって、厳しい年であるように言われている。中でも蛇は寸時にして大事を悟る。へびに睨まれた蛙等々、機敏な変化が予想される年とも言われている。要は、備えあれば憂い無しで日一日が大事である。「学びて時に是れを習う」全ては心の持ち万一つである。

思えば 20 世紀は日本を始め、世界にとってどのような年であったのか、正に激動の世紀（100 年）であったと言って良い。従って 21 世紀（2001 年）は反省と再生の世紀であるとも言える。正に温故と知新、古きを尋ね、新しきを知ることは人の世の常であり、新天地を開く原動力であることも忘れてはならない。言わば「人の道」とも言えるでしょう。

このようにして移り変わる人情（世相）の機微を悟る（知る）ことが即ち「心」と言うものであって、心は一概に養われるものではない。

子曰く「有教無類」教え有りて類なしと言われる程に、生まれたままの人間には能力に大差はなく、全ては教育次第であって教えられないものが分からないことは理の当然であり、そこに初めて「習う」ための努力が求められ、修身の術が体得されると言うものである。

最近心の教育という問題が大きな社会問題の一つに挙げられておりますが、心は決して一人歩きは致しません。一心一体共に鍛えてこそ初めて心は成長するものであって、単なる心の教育などあり得ない。「苦労に耐るべし、心身の鍛練を怠ること勿れ」是れは本学附属昌平中・高一貫校の指導目標（修為要領 17 ケ条）の一節でありますが、心は必ずその人の態度に現れ人々（相手）の心に一脈通ずるものであり、即ち人間哲学の心理に共通する課題ともなる問題である。

一昨年は孔子生誕 2550 年であり、「孔子は生きている」ということを実感させられた年でもありましたが、昨年（2000）は朱子学の創始者朱熹の生誕 870 年と逝世 800 年をそれぞれ記念する国際会議に出席した折に、朱熹の詩で有名な「少年老い易く、学成り難し、一寸の光陰軽んず可からず。今だ覚めず、池塘春草の夢、階前の梧葉、己に秋声」と読んだこの詩は一体朱熹が何時、何処で詠んだのか行く先々で尋ねてみたが分からない。中に

は日本で有名な詩であるから日本で詠んだのではないか等々。

現代の中国では無理からぬこととも言える。曾て 1960～70 年は文化大革命などがあって、一時期、孔子の教え、儒学思想が棚上げされたことを思えば当然の成り行きとも言える。而してそこは中国、最後の会場となった福建省南平市、武夷山（武夷山山脈）の一郭に 1190 年初頭に建てたと言われる紫陽書院（朱熹の学校）ここで詠んだものであると言う老学者が現れた。而もこの詩を解して前二行は生徒たちを励まし、後節二行は朱熹自らの半生を詠んだものであり、池塘早春の夢とは彼の青年時代、現在の中国江西省鉛山県鵞湖鎮、鵞湖書院に於いて当時南宋三賢人と言われた朱熹、陸九淵、呂昌謙の 3 人が 2 年有半に亙って論争を続けた夢の跡、「鵞湖論争」さながら思いを巡らせば辺りの景色は既に秋の声（白髪）を意味するものであることが理解する。正に「道統新傳」新儒学としての理気二元論としての朱子学はここ鵞湖書院に於いて練り上げられたと言うことも理解出来た国際会議であったことを記述して参考としたい。